

## 今日の授業 ブルーカーボン

温暖化が原因と考えられる災害が、日本や世界各地で起きています。気温を上昇させる効果のある二酸化炭素やメタンなどが、工場や家庭から大量に出ているためです。特に多い二酸化炭素を減らせば、地球の環境を守ることが出来ます。最近、海の植物が二酸化炭素を取り込むブルーカーボンが注目されています。福島国際研究教育機構（FIERE、エフレイ）エネルギー分野長の矢部彰さんに、解説してもらいます。

### エネルギー分野長

やべ あきら  
矢部 彰 先生



現代の生活には石油や石炭は欠かせません。発電したり、車を走らせたりにするのに使い、その際に二酸化炭素が放出されます。人々の活動によって、日本で年間12億トンの

二酸化炭素が排出されています。

一部は海や陸上の植物の光合成で吸収され、炭素となって植物内に蓄積されます。かつては陸海問わず、グリーンカーボンと呼んでいましたが、海の場合をブルーカーボンと言い換えるようになりました。陸上の植物にはない、優れた性質が明らかになってきたからです。

海の草や藻の方が陸の植物よりも活発に光合成

# 海の草や藻が光合成

するため、成長が早いのです。日本は海に囲まれています。太陽光の届く水深の浅い沿岸部で積極的に育てれば、相当の二酸化炭素を閉じ込めることが可能になるでしょう。

コンブは1年で20センチほど成長し、たくさんの二酸化炭素を取り込みます。枯れて深い海底に流された場合、炭素は底に沈んだままとなる場合があります。100年もの間、残っているケースもありました。

エフレイはコンブを大

やべ・あきら 横浜市出身。東京工科大学卒業、同大学院博士課程修了。独立行政法人産業技術総合研究所理事、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）技術戦略研究センターフェローなどを歴任。72歳。

量に栽培する方法を研究しています。苗を付けたロープをどのような位置関係で海中に張れば効率的呢か、民間企業と連携して調べています。コンブは食用にもなり、バスやトラックを動かす液体燃料にもなります。温暖化対策のみならず、さまざまな可能性を秘めています。

さらに、相馬市の松川浦が全国有数の養殖産地であるヒトエグサの陸上養殖にも挑戦しています。ヒトエグサは、のりのつくだ煮やアオリなどの原料になります。ブルーカーボンの取り組みは地球温暖化を防ぐために重要です。成果が社会で活用され、役立つよう努力していきます。

